

論壇

中嶋出

(北海道大学准教授) || 文

「いま・こゝ」に生きる
偶然に対して責任を持つ

『小商いのすすめ
——「経済成長」から
「縮小均衡」の時代へ』
平川克美著／ミシマ社
1680円(税込)

として起こっている。個人の自立と自由を優先すべき価値してきた社会は、必然的に人口が減少すると考えた方がいい。

長期的な人口減少の中で、経済成長を続けることは困難である。だったら、重要なのは経済成長しなくてはいけない。経済成長から縮小均衡へと時代が変化したことを受け入れそれに適応した社会のあり方を考え直す必要があるのでないか。

かつて批評家の福田恒存は、『人間・この劇的なるもの』(新潮文庫)の中で、「私たちが真に求めているものは自由ではない」と言つた。福田によれば、人間の本質は役割を演じて生きることである。「ある役を演じなければならず、その役を投げれば、他に支障が生じ、時間が停滞する——ほしいのは、そういう実感だ」。「いま・ここ」に生きる偶然に対しうつて責任を持つこと。その責任によつて、人は役割を手に入れ、生きる実感を獲得するのではないか。「小商い」は人間の本質的な生き方を回復する重要な方法なのかもしれない。

日本社会の難局を乗り切るために
は、経済成長による税収アップを図
るべきとの意見がある。さらなる行
政改革を断行し、グローバル化に適
応した経済戦略の遂行こそが、閉塞
的な社会を打破するというのだ。

しかし、平川はきつぱりと「言う。もう、日本は経済成長なんてしない」と、平川が注目するのは、日本の人口減少である。日本は先進国に先駆け

われている。しかし、育児給付金を出し、待機児童を減らしても、出生率の上昇は見込めない、と平川は言う。平川の見るところ、人口減少は我々が意思し望んできたことの結果

として起こっている。個人の自立と自由を優先すべき価値してきた社会は、必然的に人口が減少すると考えた方がいい。

長期的な人口減少の中で、経済成長を続けることは困難である。だから、重要なのは経済成長しなくてはいけない。経済成長から縮小均衡へと時代が変化したことを受け入れるために適応した社会のあり方を考え直す必要があるのでないか。

平川が注目するのは、「小商い」である。「小商い」は「存続し続けることが、拡大することに優先するような商い」である。日本人がこれからの世界を生きて行くためには、縮小しながらバランスを保っていくしかない。そして、この国で誇りを持つて生きていくためには、「いま、ここ」に対する責任を持つことが必要であると、平川は説く。

「小商い」では、ヒューマン・スケールを軸に「製品のひとつひとつを大切に誠意を込めて作り出」し、顧客に「信頼と満足をファードバックさせる」。拡大よりも継続が重視され短期的な利益よりも労働の意味と喜びをかみしめることができる職場が

れる二元論的構造に注目する。福田は、人間と絶対者の峻別を常に重視した。人間は完成不可能な動物であり、あらゆる現代は過渡期である。そのため完成された社会が現前することはない。ある意味で、縮小均衡の時代に入った今日、いま一度、福田を読み返すべきなのではないか。浜崎は、福田の生き方を明確かつ繊細に描き切っている。